

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

A. コースワークの充実・強化

④社会人、留学生、他分野・他大学からの多様な大学院生に対応した基礎学力補完教育実施やカリキュラムの提供

《理工農系》

●奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科

「2 コース制によるバイオ人材育成プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

背景の多様な学生の基礎学力を一定水準に持ち上げるため、基礎知識レベル別の講義と演習を組み合わせることにより、4 レベルのコースを実施した。また、アクティブラーニングや教育 IT 機器を導入することにより、一方向的な講義ではなく、双方向的な講義で学生の自主的な学習を奨励する方法を取り入れた。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

学生のレベルや背景が急速に多様化しており、全ての学生に対応するためにはさらに細分化したレベルのコースを設置する必要があったが、教員への教育負担が過大なものとなるため実施は現実的でなかった。また、アクティブラーニングや双方向的講義を導入したが、いまだに教員の習熟度が不足しており効果的な講義を多くするためには持続的な努力を必要とする。さらに大きな問題は、学生が大学院で初めてアクティブラーニングに接するため、不慣れで戸惑い講義についていけないものも見られた。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

可能な限り 1 2 人程度の少人数による演習形式の講義とし、学生が自主的に学習し発言しやすい雰囲気を作るとともに、教員の負担を減らすことを試みた。また、演習講義での評価を Rubric を用いて行い、Rubric 表は学生に予め公開して講義の到達目標と評価の方法を明確にし、目的を持って講義に参加できるようにした。しかし、日本の大学までの教育の中でアクティブラーニングがより一般化しないと、有効性は限定的になる可能性がある。